

本 田



戦

国期や江戸期の地検帳などに
は、田ごとの石高を表す時に
「本田高二百石、新田高百石」[参考]「一
石はおおよそ150kg」などと記し
ているのであるが、この本田と新田
という呼び名が旧柿の木山村を構成
していた二つの地区名そのものである
。明治9年までその名があった柿
の木山村は、ここ本田と仁井田を併
せた地域であることは、先月号で紹
介させていただいた。そもそも仁井
田という地名の由来は「新しい田」
新田であることも先月号で触れた。
それに対して本田は「もともと拓か
れていた田」という意味である。つま
り、本田は仁井田よりも集落として
の歴史は古く、長く柿の木山村の中
心地であった。

本田は、仁井田川を挟んで仁井田
地区の対岸に沿っている。地区の南
東側の山に沿って高知道が走る。そ
の昔は仁井田よりもこちらが中心地
であったということが今となっては
想像できない。

さて、これまで何度か「郷土制度」
を取り上げた。江戸期の土佐藩財政改
革の目玉政策のひとつであったこの
制度は「武士以外の身分の者でも、あ
る一定の面積の原野を切り開き、水田
を作り、その地で耕作を続けるならば、
名字帯刀を許し武士とみなす」という
ものである。現在の窪川地区全体で、
当時おおよそ50名の郷土が誕生したの



地区の氏神様「白皇神社」

であるが、中でも高知城下の浦戸町か
らここ本田の地にやって来て、三十石
分の荒地を一家総出で開拓した宮
内市蔵が窪川郷土第一号である。浦戸
での市蔵は「福山屋」という屋号の商
人であった。同時に町年寄（土佐では
総年寄と呼んでいたという説もある）
という役人を務めていたという。当時
は宮内姓を名乗らず福山屋伊三郎と
いう名で暮らしていた。福山屋はたい
そう繁盛していたようであるが、伊三
郎はその商店を閉め、町年寄役も返上
し、姓ももとの宮内に戻し、当時の辺
境の地での開拓に挑戦したのである。
大転換である。今の時代で言えば「安
定した収入を捨ててインターンして新
規就農といったところかもしれない。
市蔵たちは猛烈なバイタリティーを
もって開拓に勤しみ、この地でも大き
な成果を上げ続けたという。

ところで本田は、ここ数年、若者の
人口が増えているのだと地区の方か
ら聞いた。現在47世帯、おおよそ90人が
暮らしている。

町のうごき

(12月31日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,414	-6	男 3	18	15	6
女	9,412	-5	女 2	18	18	7
計	17,826	-11	計 5	36	33	13
世帯数	8,630	-4	(12月中の届出)			

窪川地域 12,504人 大正地域 2,556人 十和地域 2,766人

四万十川の水質状況

	適正值(mg/l)	1月10日
リン酸	≤ 1.0	測定範囲以下
硝酸	≤ 0.5	0.298
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.35
化学的酸素要求量	≤ 10.0	2.037

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部